

位置と環境

笠野原台地のほぼ中央部、郷之原の標高約70mの広大なシラス台地上にある。

調査の経緯

一般国道220号線バイパス建設工事に伴い、昭和62年（1987）～昭和63年に鹿児島県教育委員会が発掘調査を実施した。

遺構と遺物

縄文時代早期から近世・現代まで長期にわたる複合遺跡である。

縄文時代に属する遺構・遺物は早期を主体とし、晩期の遺物も多く出土した。

縄文時代早期の遺構は、集石遺構が8基検出された。また、集石遺構に囲まれた中央に広場状の空間が存在するが、住居などの遺構は検出されていない。早期の土器は、平椀式土器を主として、石坂式・塞ノ神式土器が出土している。平椀式土器は、深鉢形土器と壺形土器とがあり、深鉢形土器には口縁部肥厚帯の幅が広いものと狭いものとに分けることができた。

弥生時代の遺構・遺物は、中期末から後期初頭にかけ位置づけられるものである。

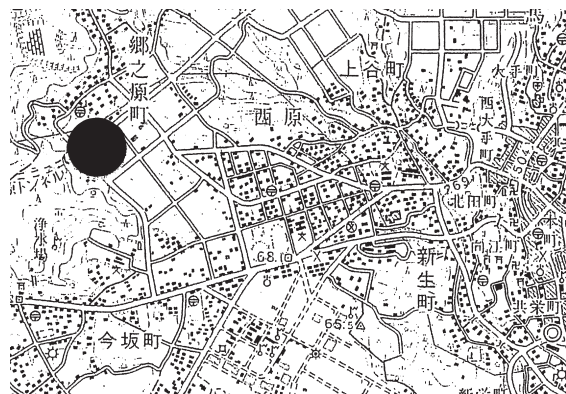
遺構は、竪穴住居跡3軒、掘立柱建物跡8棟、円形周溝1基、溝状遺構3条が検出された。

竪穴住居跡はいずれも方形の平面プランで、約4m四方の規模を呈する。掘立柱建物跡には、平地式建物跡と考えられる梁間が3間の建物跡と、高床倉庫と考えられる梁間が1間の建物跡とが検出された。

弥生時代の土器は、山ノ口式土器の範疇に属する在地系土器が主体であり、ほかに須玖Ⅱ式土器に属する土器や瀬戸内系の矢羽根透かしの高坏など移入系土器が出土している。これらの出土状況は、山ノ口式土器の存続年代を考えるうえで重要な指標となるものである。

石器には磨製石鏃や扁平打製石斧・磨石・砥石などが出土した。また住居跡からは台石が検出された。近世では、墓が7基検出された。古銭が17枚副葬されていた墓もあり、貴重な資料となった。

現代の遺構としては、第2次世界大戦中に飛行機を格納するための掩体壕や、誘導路とその付属施設



第1図 前畑遺跡の位置

が検出され、戦跡考古学上注目できる。

特徴

縄文時代早期の平椀式土器が多量に出土し、また集石遺構に囲まれた広場状の空間が存在する。

弥生時代中期末から後期初頭に位置づけられる竪穴住居跡と掘立柱建物跡からなる集落跡が検出された。

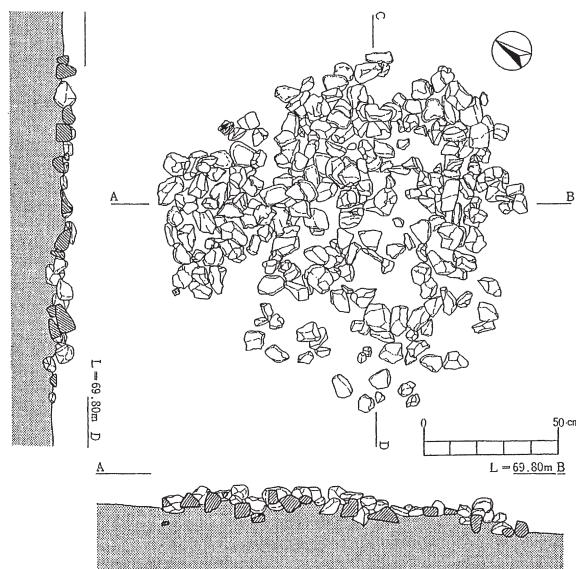
資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管され、その一部は上野原縄文の森展示館に展示されている。

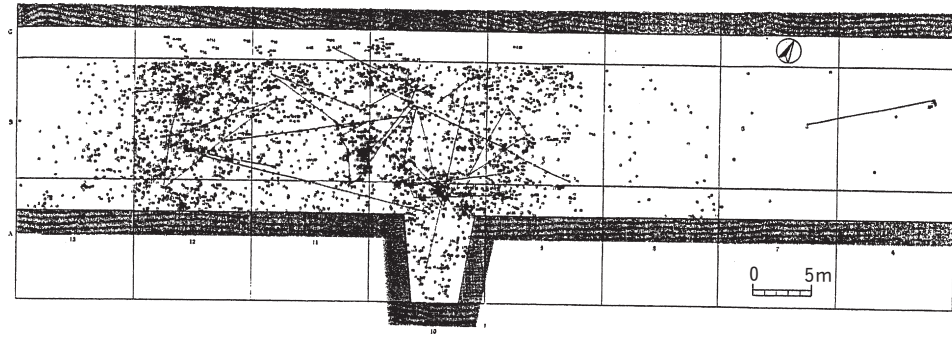
参考文献

鹿児島県教育委員会1990「前畑遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』52

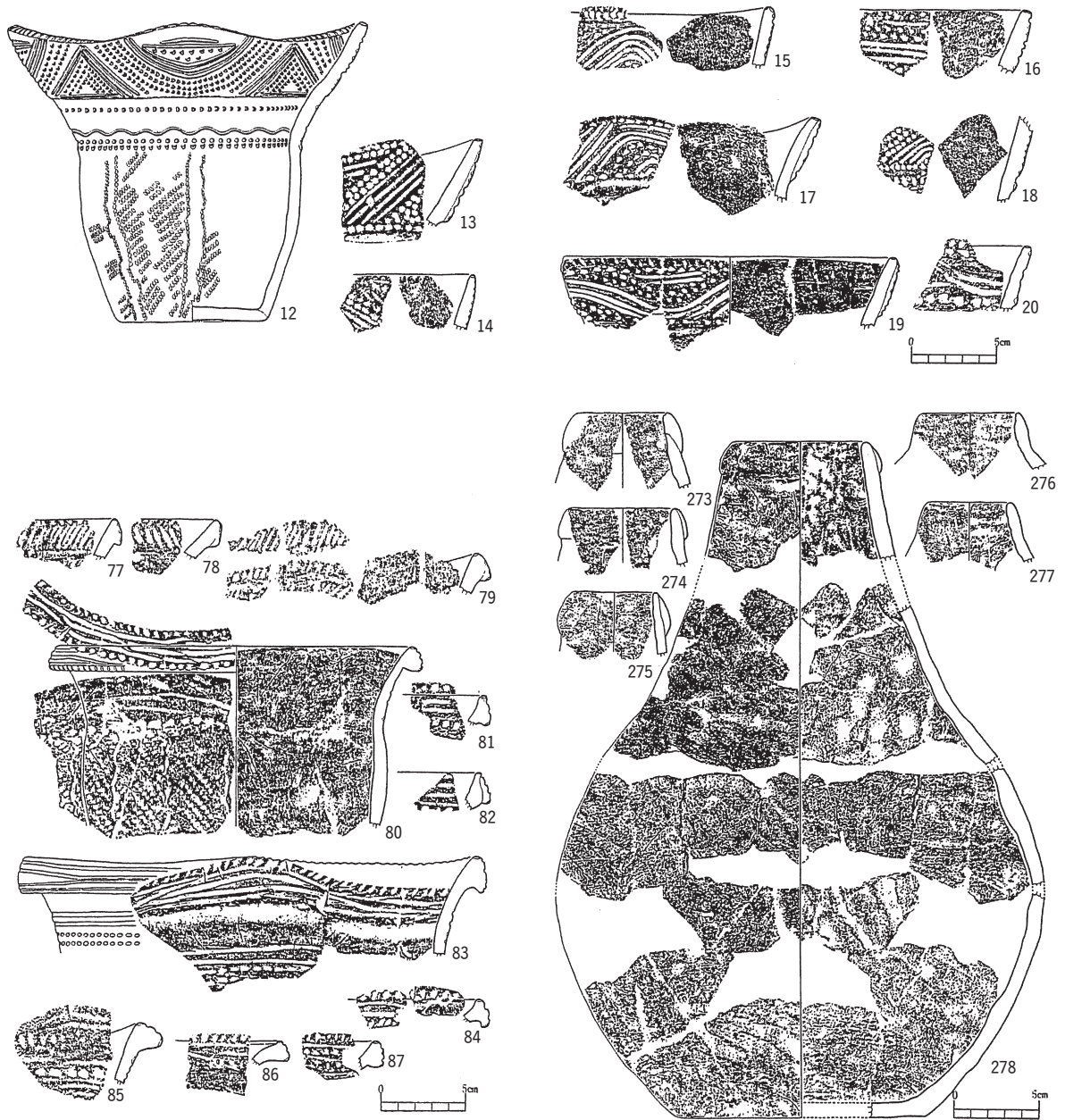
(八木澤一郎)



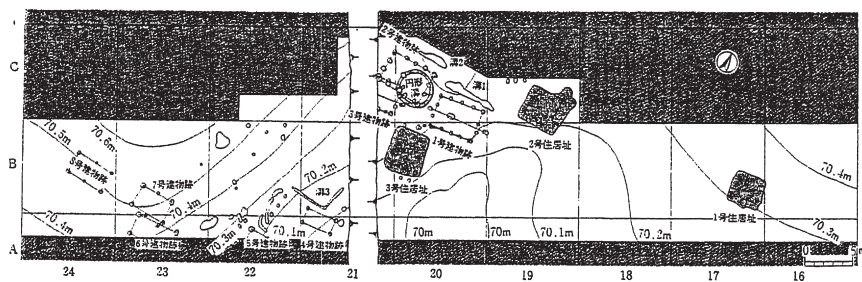
第2図 集石遺構



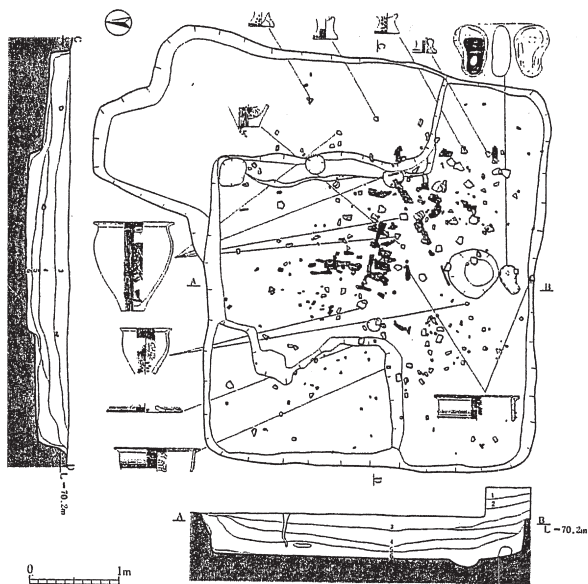
第3図 縄文時代早期遺物出土状況



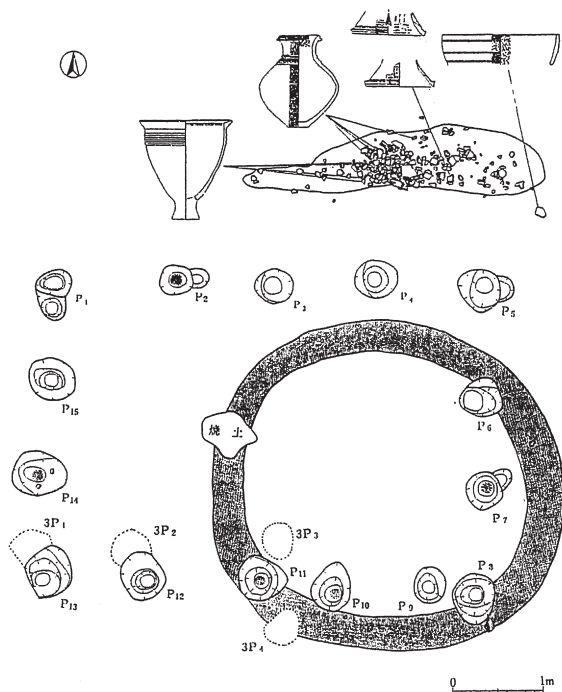
第4図 平椀式土器実測図



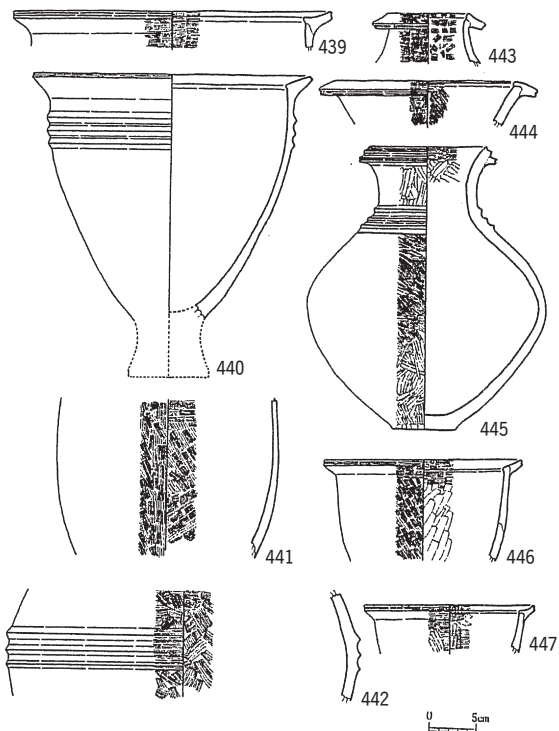
第5図 弥生時代遺構検出状況



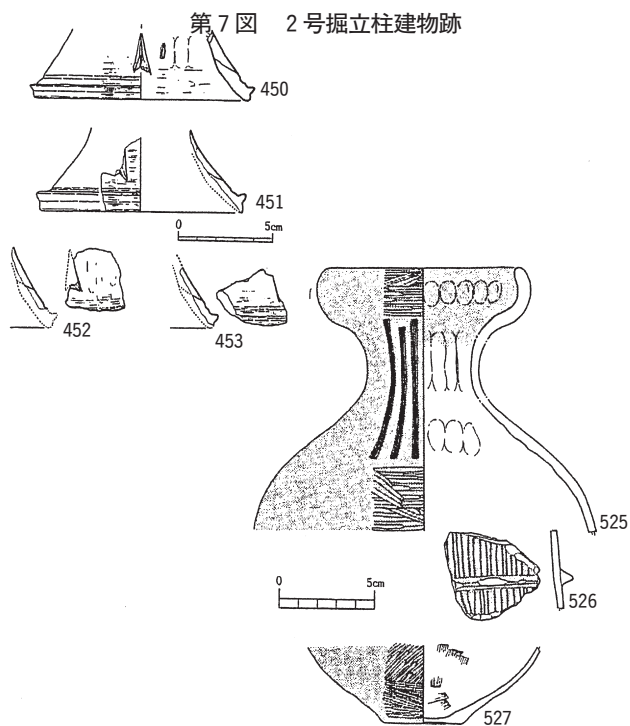
第6図 2号竖穴住居跡



第7図 2号掘立柱建物跡



第8図 2号掘立柱建物跡出土遺物実測図



第9図 弥生時代出土遺物実測図